

学生時代

幸田露伴

青空文庫

わたくしの学生時代の談話をしると仰おっしやっても別にこれと云つて申上げるようなことは何もございません。特ことにわたくしは所謂学生生活を仕た歳月が甚だ少くて、むしろ学生生活を為せずに過して仕舞つたと云つても宜い位ですから、自分の昔話をして今の学生諸君に御聞かせ申そうというような事は、實際ほとんど無いと云つてもよいのです。ですから平に御断りを致します。何処どこの学校の寄宿舎にでも居つたとか何とかいう経歴がありましたら、下らない談話でも何でも、何か御話し致しましょうけれども。

強たって何か話が無いかとお尋ねならば、仕方がありません、わたくしが少時の間——左様です、十六七の頃に通学した事のある漢

学や数学の私塾の有様や、其の頃の雑事や、同じ学舎に通つた朋友等の状態に就いてのお話でも仕て見ましよう。今でも其の時分の面影を残して居る私塾が市中を搜したらば少しは有るでしょうが、殆ど先ず今日は絶えたといつても宜敷いのです。私塾と云えばいづれ規模の大きいのは無いのですが、それらの塾は実に小規模のもので、学舎というよりむしろただの家といった方が適當な位のものでして、先生は一人、先生を輔佐して塾中の雑事を整理して諸種の便宜を生徒等に受けさせる塾監みたような世話焼が二人——それは即ち塾生中の先輩でして、そして別に先生から後輩の世話役をしろという任命を受けて左様いう事を仕て居るといふのでも無いのですが、長らく先生の教を受けて居る中に自然とおのず

左様いう地位に立たなければならぬように、自然と出来上がった世話役なので、塾は即ち先生と右の好意的世話役の上足弟子とで維持されて居る訳なのです。

左様いう塾に就いて教を乞うのは、誰か紹介者が有ればそれで宜しいので、其の頃でも英学や数学の方の私塾はやや営業的で、規則書が有り、月謝束修の制度も整然ちやんと立って居たのですが、漢学の方などはまだ古風なもので、塾規が無いのではありませんが至って漠然たるものでして、月謝やなんぞ一切の事は規則的法律的営業的で無く、道徳的人情的義理的で済んで居た方が多いのです。ですから私の就学した塾なども矢張り其の古風の塾で、特に先生は別に収入の途が有って立派に生活して行かるる仁であつた

ものですから、猶更寛大極まったものでした。紹介者に連れて行って貰つて、些少の束修——金員でも品物でもを献納して、そして叩頭おしぎして御願ひ申せば、直ちに其の日から生徒になれた訳で、例の世話焼をして呉れる先輩が宿所姓名を登門簿へ記入する、それで入学は済んだ訳なのです。銘々勝手な事を読んで行つて勝手な質問をする、それが唯一の勉強法なのですが、中には何を讀んで好いか分らないという向がある。すると、正直に先生に其の旨をいつて御尋ねする、それなら何を讀んだら宜敷かろうと、学力相応に書物を指定して下さいと云つたような事で誰しも勉強したものです。

そういう訳で銘々勝手な本を讀みますから、先生は随分うるさ

いのですが、其の代り銘々が自家でもって十分苦しんで読んで、字が分らなければ字引を引き、意味が取れなければ再思三考するというような勉強した揚句に、いよいよ分らないというところだけを先生の前に持出して聞くのですから、一人が先生の何分間をも費すのでは有りません。よくよく勉強の男でも十分間も先生を煩わすと云うのは無い位でした。それで、「誰^{だれ}某^{それ}は偉い奴だ、史記の列伝丈を百日間でスツカリ読み明らめた」というような噂が塾の中で立つと、「ナニ乃公なら五十日で隅から隅まで読んで見せる」なんぞという英^{えら}物^{もの}が出て来る、「乃公はそんなら本紀列伝を併せて一月に研究し尽すぞ」という豪傑が現われる。そんな工合で互に励み合うので、ナマケル奴は勝手にナマケて居るの

でいつまでも上達せぬ代り、勉強するものはズンズン上達して、公平に評すれば畸形的に発達すると云つても宜いが、兎に角に発達して行く速度は中々に早いものであつたのです。

併し自修ばかりでは一人合点で済まして居て大間違いをして居る事があるものですから、そこで輪講という事が行われる。それは毎日輪講の書が變つて一週間目にまた旧の書もとを輪講するというようになつて居るのです。即ち月曜日には孟子、火曜日には詩経、水曜日には大学、木曜日には文章規範、金曜日には何、土曜日には何というようになつて居るので、易いものは学力の低い人達の為、むずかしいものは学力の発達して居るもののためという理窟なのです。それで順番に各自が宛がわれた章を講ずる、間違つて

居ると他のものが突込む、論争をする、先生が判断する、間違つて居た方は黒玉を帳面に記されるという訳なのです。ですから、

「彼奴高慢な顔をして、出来も仕無い癖にエラがつて居る、一つ苦しめて遣れ」というような事ですから、今思い出すとおかしくてならんような争い方を仕たものです。或る一人が他の一人を窘めようと思つて、非常に字引を調べて——勿論平常から字引をよく調べる男でしたが、文字の成立まで調べて置いて、そして敵が講じ了るのを待ち兼ねて、難問の箭を放ちました。何様も十分調べて置いてシツツコク文字論をするので講者は大に窘められたのですが、余り窘められたのでやがて昂然として難者に対して、

「僕は読書ただ其の大略を領すれば足りるので、句読訓詁の事な

どはいつでもよいと思つて居る」など互に鎬を削つたものである。

此の外は復文という事をする。それは訳読した漢文を原形に復するので、ノーマステーキの者が褒詞を得る。鬪文鬪詩が一月に一度か二度ある、先生の講義が一週一二度ある、先ずそんなもので、其の他何たる規定は無かつたのです。わたくしの知つてゐる私塾は先ずそんなものでした。で、自宅練修としては銘々自分の好むところの文章や詩を書写したり抜萃したり暗誦したりしたもので、遅塚麗水君とわたくしと互に相争つて莊子の全文を写した事などは記憶して居ます。私は反古にして無くして仕舞いました。が、先^{せん}達^{だつ}て此事を話し出した節聞いたらば、麗水君は今も当時写したのを持って居るといふ事でした。

わたくしは前にも申した通り学生生活の時代が極短くて、漢学の私塾にすらそう長くは通いませんでした。即ち輪講をして窘められて、帳面に黒玉ばかりつけられて、矢鱈に閉口させられてばかり居たぎりで、終つひに他人を閉口させるところまでには至らずに退塾さがって仕舞いましたのです。

青空文庫情報

底本：「露伴全集 第二十九卷」 岩波書店

1954（昭和29）年12月4日第1刷発行

初出：「中學文藝」

1906（明治39）年6月臨時増刊

※初出時の表題は、「三十年前の小私塾」です。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：地田尚

校正：今井忠夫

2001年6月18日公開

2012年5月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

学生時代

幸田露伴

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>